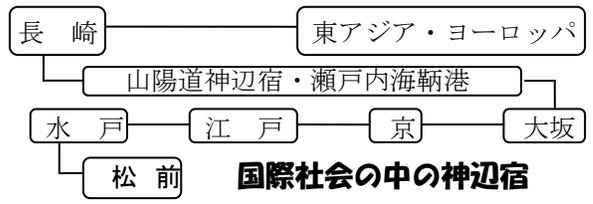


山陽道神辺宿第51号

—神辺本陣・廉塾の歴史情報誌—



蠣崎波響画「黄葉夕陽村舎図」 の原図を描いたのは誰か

掛端 亘



蠣崎波響画（企画展図録より）

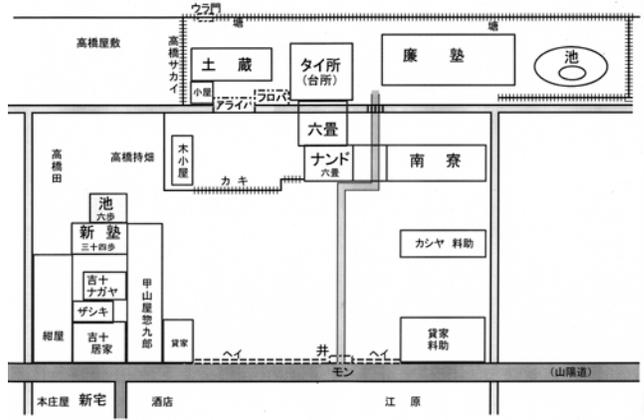


星野文良画（企画展図録より）

この度発行された広島県立歴史博物館平成24年度夏の企画展図録『菅茶山と化政文化を彩る7人の巨人たち』で、蠣崎波響画「黄葉夕陽村舎図」が掲載された。図録ではこの図に類似する資料が4点あることが紹介されている。蠣崎波響画以外では、星野文良画であり、「□雪」と記した画人であり、四人目は筆者が昭和51年(1976)「菅茶山とその弟子たち」(図録)を製作した際、廉塾の当主から示された写真版の画である。蠣崎波響画以外の三点は廉塾伝来資料である。但し、図録では「□雪」の画は紹介されていないので、「□雪」以外の三図に共通していることは構図や絵柄



作者不明・写真版（神辺郷土史研究会図録より）



廉塾屋敷略図（本図は原図を簡略化した）

が類似している真景図である。真景図とは特定の場所を写生によって描いた画のこと。すなわち、現地でしか描けない画である。文政7年(1824)に作成された「廉塾屋敷図」と三図に共通する構図や絵柄は次の個所である。

- ①山陽道に面した門と井戸。
- ②南寮と記された建物や垣。
- ③図の中央部から左に見られる用水路。

蠣崎波響(1764～1826)は北海道松前藩12代松前資広の5男で家老蠣崎家の嗣子となる。幼少期に江戸の建部凌岱のちに宋紫石について南蘋派の画を、寛政3(1791)年京都で円山応挙に画を学ぶ。文化4(1807)年松前氏

は陸奥国梁川(福島県)に転封となり、家老であった波響は領地回復に努力し、文政4(1821)年復領を実現した。寛政2年27歳のときアイヌの首長を描いた「夷酋列像」(ブザンソン市立美術館蔵)は代表作である。星野文良(?~1846)は白河藩の絵師で画を谷文晁に学んだ。松平定信が享和元年(1801)に築造した南湖を描いた「南湖名勝図」や、各種の蓮の花を描いた「清香画譜」は代表作である。

蠣崎波響や星野文良は画に巧みであったが、二人とも一度も廉塾を訪れることはなかった。ということは、二人の図は誰が描いた図を模写したという事になる。蠣崎波響や星野文良と接点があり、しかも廉塾を訪れたことのある人物に、白河藩の画僧白雲上人(1764~1825)と大野文泉(1774~1825)がいる。白雲は松平定信に仕え『集古十種』の編纂事業に加わった。寛政12年(1800)4月19日にその事業のために同藩絵師大野文泉と共に廉塾を訪れている。集古十種とは松平定信が全国各地の古画、扁額、銅鐸など10種の古宝物を、所在地や寸法さらに模写図ともに編纂した模写図録である。それ故この事業に参加した絵師は写生画に卓越した人たちであった。

茶山はこの二人について詩集『黄葉夕陽村舎詩 卷之五』に「白雲上人に贈る」と題して、「上人奥州白河人、画を能くす。白河侯、集古十種を著し、搜索模写す。上人も亦焉こゝれに與あずかる」。大野については「名は文泉、奥州白河の人、写真を能くす」と記している。

二人は翌日の20日に廉塾を去り安芸の宮島に向かった。その帰路の5月15日再び廉塾に戻り、16日備後の府中や新市の吉備津神社に赴き、19日に廉塾に帰った。茶山日記はその夜に「二客、余に山水図を作る」と記している。この時、二人には黄葉夕陽村舎図を描く時間はあった筈である。その時に一

枚を茶山の元に置いて行ったとすれば、それが写真版かも知れない。そして二人が去ったのは20日であった。いずれにしても、原図を描いたのは白雲か文泉のどちらかである。

黄葉夕陽村舎図の原図を持ち帰った白河藩の二人は、仲間である星野文良に見せたことは容易に推察出来る。模写を描いたもう一人の蠣崎波響は、中村真一郎著『蠣崎波響の生涯』で茶山との関係について、「波響にとって茶山は生涯の詩の師匠である」と記している。波響の居所は松前(北海道)であり、文化4年から文政4年(1821)まで梁川であった。奥州街道の北の起点である白河は、松前も梁川も江戸への往来の際には、必ず通行しなければならない地である。画人でもあり詩人でもあった波響は、白河に備後神辺の茶山の居所を訪ねた者が居れば、その人と合わずには居れない筈である。ここに、波響が原図と出会う機会があったといえる。

筆者は関係資料を検討したが、波響画の原図を描いたのは、茶山が「写真を能くす」と記した大野文泉ではないかと推定する。「写真」とは真景図のことである。その後、文泉は文化8年(1811)朝鮮通信使への対応のため、対馬へ赴く大学頭林述斎の随員として神辺宿を訪れ、茶山と再会した。茶山日記は「巨野(大野のこと)文泉、酒祭(林述斎のこと)に従って西行し、夜、来訪して、諸画を恵む」と記す。この諸画の中に、文良画や写真版が混じっていた可能性は極めて高い。

執筆後

写真版「黄葉夕陽村舎図」の撮影対象であった図が、歴史博物館に寄付されないとしたら、茶山の居所であった「廉塾」の何処かにあるのではないかと、この度の図録を見て思ったことである。

発行者 掛ノ端 亘(神辺町川北1046-1)

発行日 平成24年7月23日